



こども歴史なぜなに相談室



「草戸千軒」は、本当に洪水で滅んだの？

答えは「NO」です。では、その質問について詳しくお話ししましょう。
博物館の通史展示室を見終わって薄暗い通路を進むと、突きあたりの壁、町が復原されている「よみがえる草戸千軒」の部屋に入る前に、次の文章が大きく書かれています。

往昔 本庄村 青木が端の辺より
五本松の前までの中島に
草戸千軒という町ありけるが

寛文十三年 癸丑 洪水の節
青木が端の向なる土手を切りければ
たちまち 水押し入り
千軒の町家ともに押し流しぬ

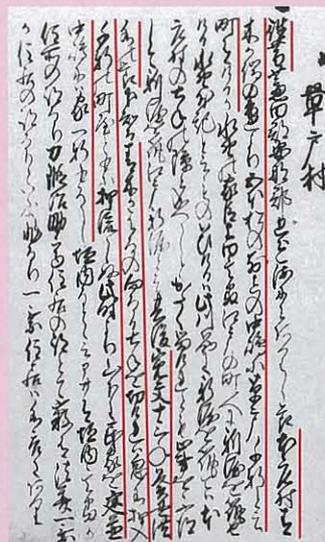
この時より山下に民家を建て並べ
中島には家一軒もなし

この文章は、江戸時代中頃に書かれた『備陽六郡志』から抜き書きしたものです(注1)。「草戸千軒」という町の名が出てくる書物はこの『備陽六郡志』が初めてです。

草戸千軒町遺跡の発掘調査は昭和36(1961)年に始まりました。調査が進むにつれ、木簡や輸入陶磁器・漆器・下駄・貨幣・鬪茶札・硯など、様々な生活用品が大量に出土し、それまでほとんど分かっていなかった中世の人々の暮らしが具体的に明らかになりだしたとあって全国の注目を集め、「東洋のポンペイ(注2)」というキャッチフレーズが生まれました。そのうえ『備陽六郡志』の洪水の話もあって、「草戸千軒は一度の大洪水で滅んでしまった町」というイメージが定着してしまいました。

ですが、『備陽六郡志』は「寛文十三(1673)年」の百年近く後に書かれたもので、洪水以前の町の様子を正しく伝えているとは限りません。その他にも、この本が伝える「草戸村」の「昔」は、「芦田郡・安那郡辺迄海にてありし節」となっていますが、この芦田郡・安那郡を含む神辺平野には、ずっと昔の縄文時代の遺跡があることから、草戸千軒の栄えた中世には陸地だったことが確かです。そもそも神辺平野まで海であれば、草戸千軒町遺跡の場所も海に沈んでしまいます。これらのことから『備陽六郡志』から、洪水直前まで草戸千軒の町が続いていたとは考えられないのです。

約30年間続いた発掘調査により、草戸千軒町遺跡は室町時代末、16世紀初めまでのもので、何らかの理由で、町が一気に「放棄」されたと推定されています。ですが、その理由までは分かっていません。この「なぜ？」には答えがまだ見つかっていないのです。



赤線の部分が左の文章です。



注1 『備陽六郡志』は元文・安永年間(1736-1781年)に福山藩士の宮原直樹がまとめた六郡(深津・安那・芦田・品治・沼隈、および分郡)の地誌です。ここでは旧字なども、読みやすいように改めています。

注2 ポンペイはイタリア南部にある都市遺跡で、西暦79年にヴェスヴィオ火山の大爆発により壊滅し、火山灰に埋もれたまま18世紀に発見されるまで地中に眠っていました。